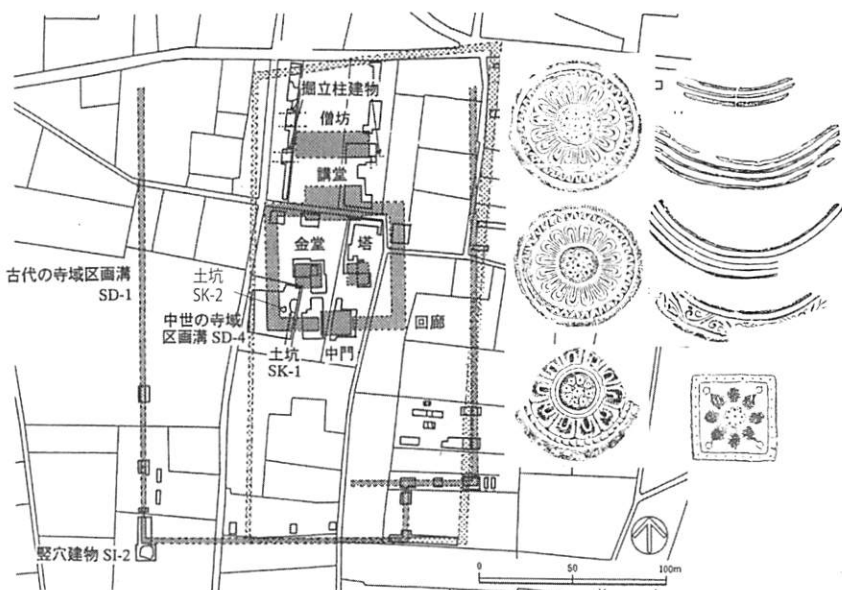


結城廃寺出土埴仏の再検討

皆川 貴之

はじめに

埴仏とは、主に壁面荘嚴や念持仏として用いられるもので、金箔や彩色が施されるものも少なくない。陰刻の范型（埴仏型）に粘土をつめて仏像を表出し、それを焼きしめることよって作製される。一つの陽刻原型から複数の埴仏型を作ることが可能なうえ、型作製の段階で図像に手を加えることもできるため、兄弟関係の把握が困難である。埴仏研究は、主に考古学・美術史学から年代・技法・用法について研究が進められてきた。¹⁾近年は発掘調査の増加とともに資料が増加しており、一九九五年に清水昭博氏が集成した際は一〇二遺跡だったが（清水一九九五）、現在では一四九遺跡にも上る（森本編二〇一三）。古代の埴仏は宮城県から大分県まで広く分布しているが、遺跡数・点数ともに畿内とその周辺が多くを占めている。地方においてはまとまった点数が出土するのは非常に稀なため、結城廃寺から出土した五十点をこえる埴仏は、東国唯一ともいえる貴重な資料である。しかし、この資料に関する議論は十分とは言えず、さらなる検討が必要である。そこで本稿では、結城廃寺出土埴仏について改めて検討を加えていきたい。なお、写真図版については縮尺不同である。



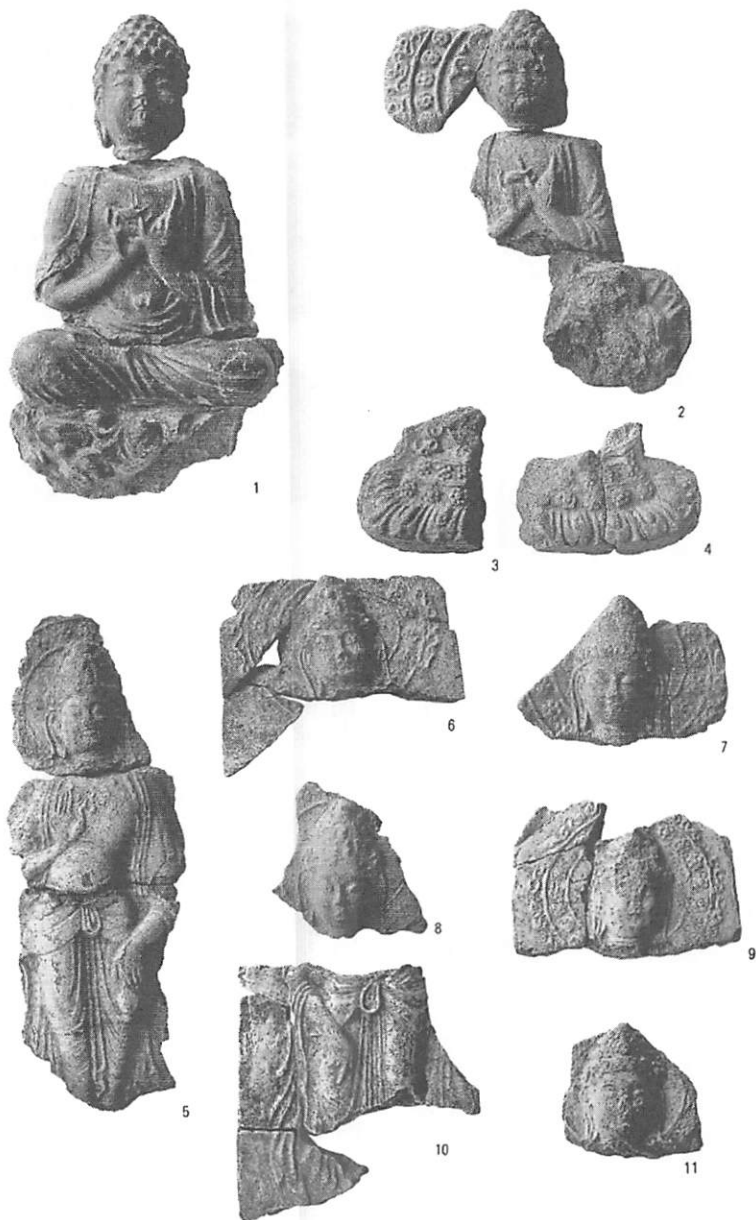
第1図 結城廃寺と出土瓦

一 結城廃寺出土埴仏

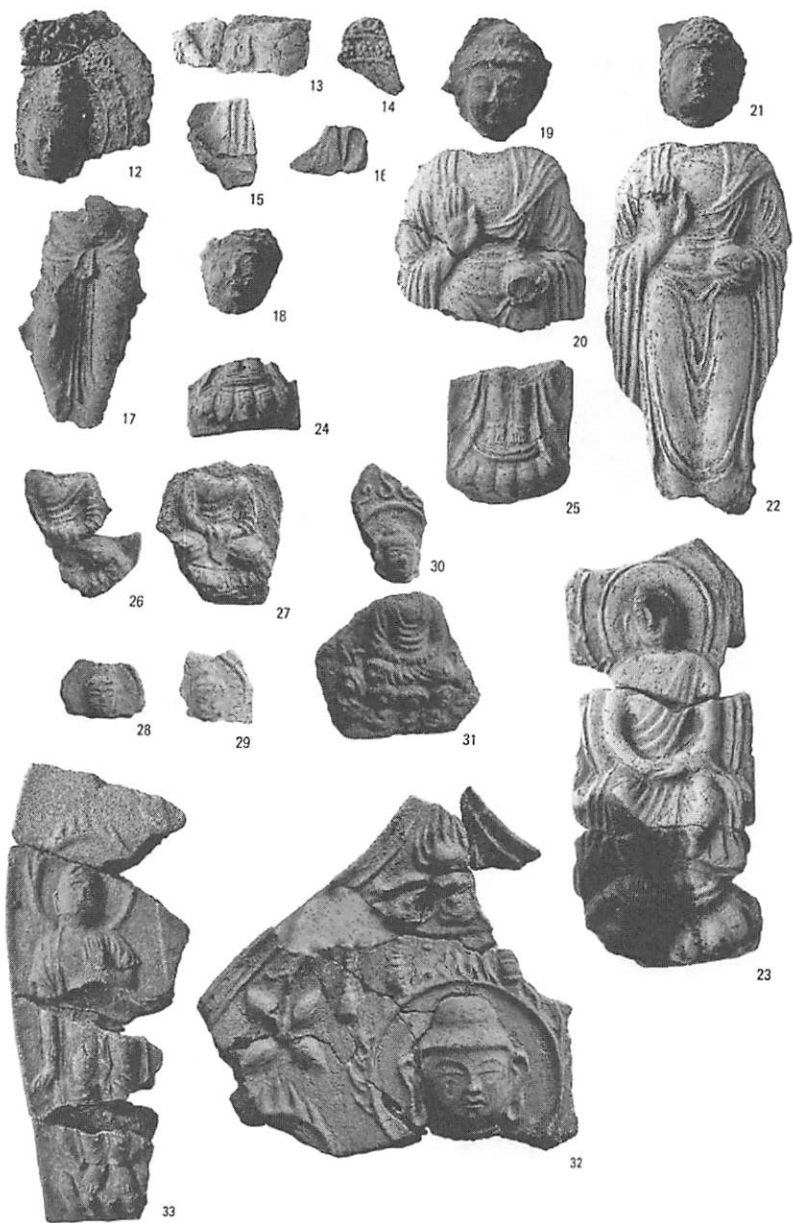
結城廃寺は西に金堂、東に塔、回廊は中門と講堂を結ぶ。講堂の北には掘り込み地業のみの確認だが僧坊が確認されている(第1図)。多量の埴仏に加え、蓮華文が描かれた舍利孔石蓋や榦先瓦が出土し、東国の古代寺院としては特異な様相をもっている。埴仏は回廊内南西隅の土坑(SK-1)から大量の瓦類や塑像、壁土、炭化材とともに出土した。十世紀代の土師器が伴出していることから、その時期に火災にあったと考えられている。破片数で五四点出土し(第2、4図)、うち三点(二種)は法隆寺蔵銅板鑄出如来三尊像、法隆寺献納宝物の押出仏との同原型資料である(斎藤一九九九)。以下、特筆すべきものについてそれぞれふれておく。

阿弥陀如来坐像(第2図1・2)

この二点は同じ埴仏型から作られたものである。第



第2図 結城廃寺出土埴仏(1)



第3図 結城廃寺出土埴仏(2)



第4図 結城廃寺出土埴仏(3)



第6図 鑄出銅板仏像型



第5図 法隆寺蔵押出仏

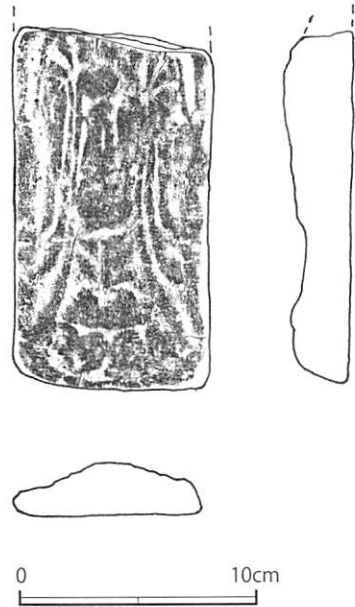
2図1は縦一五・七cm、横九・一cm。第2図2は縦一六・九cm、横一五・〇cm。頭部に螺髪が表現され衣は偏袒右肩にまとう。胸前で説法印を結び、蓮華座の上で左足を上にして結跏趺坐する。頭光は内側から、蓮華文、六花文、唐草文となっている。2の裏面には布目痕が確認できる。博仏や押出仏のうち、この図像を持つ例は限られ、代表的な例としては大脇潔氏が同原型資料A群とした一群がある（大脇一九八六）。中尊は衣を通肩にまとい、左足を上にした結跏趺坐で説法印を結ぶ。通肩であることや印を結ぶ手の表現など、細部に違いはあるものの、頭光の表現や像の構成は似ている（第5図）。博仏型作製の段階で改変がおこなわれたものと考えたい。

如来倚像（第3図23）

法隆寺蔵鑄出銅板仏像型（押出仏の陽刻原型）の同原型資料とされる（第6図）。縦一三・〇cm、横五・六cm。頭部に螺髪の表現はなく、衣は偏袒右肩にまとう。両手は不鮮明だが右手の上に左手をのせ腹前で組み、足元の台座には蓮華が表されている。光背は二重円光である。



第8図 法隆寺献納宝物押出仏



第7図 高麗寺跡出土埴仏

わずかに金箔が残り裏面には布目痕がある。法隆寺蔵の資料とは若干の違いがあるが、これも埴仏型に手が加えられた結果であろう。

立像足部 (第3図25)

縦四・三cm、横三・七cm。足部と蓮華座のみの小片である。裳裾を蓮華座下まで長く垂らし、蓮華座には五弁の花弁があらわされている。山城高麗寺跡から同様の埴仏が出土している(中島二〇〇八、第7図)。

如来坐像 (第3図26・27)

26は縦四・一cm、横三・八cm。27は縦五・〇cm、横四・三cm。衣を偏袒右肩にまとい、腹前で組んだ両手を衣で覆っている。台座には複弁の蓮華がみられる。一部欠損せずに残っている上部は曲線的で、独尊であった可能性がある。法隆寺献納宝物押出仏の中央部に打ち出された如来坐像三体が同原型資料である(第8図)。

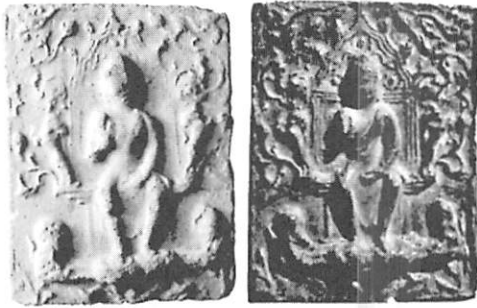
以上、一部の資料を個別に述べてきた。これらは畿内の埴仏との関わりがうかがえるもの、その可能性があるものであるが、その他の資料は類例がなく、一部の埴仏型が外部からもたらされ、他は独自に製作されたことになる。胎土は瓦とよく似ているので在地で作られたものであろう。

埴仏は型作りで大量生産が可能のため、多量の埴仏が出土した遺跡では同じ図像・形状の埴仏がまとまっていることが多い。こういった場合の用法は壁面荘嚴と考えられるが、結城廃寺の場合、図像・形状ともにそのバリエーションの豊富さが目につく。まとまりのなさから荘嚴を目的として壁面をうめたとは考えがたい。清水氏も「幾人かの壇乙の寄進によって」「同寺に集積」されたものと想定し、用法を礼拝的なものとした（清水一九九五）。埴仏が出土したのは第2図2の一点を除き、全てSK11からである。層位などの出土状況が不明なため推測の域を出ないが、火災を受け一括して廃棄されたものであることから、同じ建物の中にまとまって置かれていた可能性がある。また、五四点のうち六点には金箔が残っていることから、礼拝的な用法に合わせて、壁面をうめることはできなくとも堂内荘嚴の効果は十分に認められるであろう。³⁾

二 埴仏の伝播と僧侶

前節では結城廃寺出土埴仏のうち畿内の埴仏と関わるものについてふれたが、そもそも埴仏はどのように伝播していくのか。

まず、日本で初期の埴仏に火頭形三尊埴仏がある。火頭形三尊埴仏は、橘寺などで出土するA類と、穴太廃寺や阿弥陀谷廃寺などで出土するB類にわけられる。B類とほぼ同一の図像をもつ埴仏に、中国西安市で多数出土して



第9図 倚坐独尊埴仏
左：虚空蔵寺跡、右：南法華寺（複製）

いる「善業泥」埴仏とよばれるものがある。「善業泥」埴仏は、インドへの求法の旅を終えて唐に帰った三蔵法師玄奘の発願によって作られたものである。その図像から三種に分類され、その最も後出のものが日本に伝来したものとされている（萩原二〇〇二）。そして唐から日本へと埴仏を招来した人物は、遣唐留学僧として玄奘に直接師事した道昭があげられる（浅井一九九七）。道昭は唐から帰国したのち、飛鳥寺東南禪院を建立したのが六六二年で、その後、十年余り天下を周遊し架橋などの活動を指導している。

日本にもたらされた火頭形三尊埴仏B類の分布は、淀川流域一帯が主体で、なかでも九点の出土が確認されている山崎院推定地はその分布の中心的な性格をもっている。山崎院は行基の建立であるが、ここからは飛鳥寺東南禪院と同範の瓦も出土していることからそれ以前の七世紀後半から機能していたのは明らかで、道昭との関わりが指摘されている（萩原二〇〇三）。また、網伸也氏は、同原型資料の分布状況や製作技法の検討、軒瓦の同範関係などから、この火頭形埴仏B類の分布が道昭の天下周遊のルートと密接な関係があることを指摘している（網二〇一三）。河内百済寺跡から複数個体の火頭形三尊埴仏が出土したことから、火頭形三尊埴仏B類を道昭に限定して結びつけることを疑問視する意見もある（中東二〇一五）。同型の埴仏が長野県や岡山県で出土していることもあり妥当な指摘であるが、限定は出来なくとも少なからず淀川流域の埴仏に道昭が関わったことは想定できるだろう。道昭が遊行する際に埴仏型を持ち、それぞれの地で埴仏を作製したとすれば、唐での玄奘、日本での道昭のように埴仏の製作の背景として僧侶が重要な役割を担っていたと考

えられる。

同様に埴仏と僧侶の密接な関わりがあるものとして虚空蔵寺がある。虚空蔵寺では多量の埴仏が塔周辺に集中して出土した。埴仏は倚坐独尊埴仏のみで南法華寺（壺坂寺）のものと同原型資料である（第9図）。南法華寺は、大宝三年（七〇三）に弁基が建立したとされ、弁基は飛鳥寺東南禅院で学んだ僧侶である。虚空蔵寺へと埴仏をもたらしたのは僧法蓮であるとの指摘がある（後藤二〇〇八）。法蓮は、大宝三年九月にその医術を評価され豊前の野四〇町を施される。養老五年（七二二）六月には三等以上の親に宇佐君の姓を賜っており、宇佐と縁の深い僧侶である。飛鳥寺東南禅院において弁基のほか飛鳥の僧侶たちと接点をもち、そのネットワークと、虚空蔵寺の建立と埴仏の採用に直接的な結びつきを想定できる。

こうした例は、僧侶が埴仏型を持つて移動し、その行先で埴仏を作製したことを示している。埴仏型は寺の所有ではなく、僧侶が所有し管理していたといえるだろう。もちろん全ての埴仏が当てはまるとは言えず、大型多尊埴仏などは全く異なるものである。この点に関して参考となる例をあげ、埴仏型のあり方について考えてみたい。

第一に、山田寺の十二尊連坐埴仏と四尊連坐埴仏である。十二尊連坐埴仏は如来形が縦三段、横四列に配置される。十二体はすべて同じ図像で、一つの原型を十二回型押しし埴仏型が作られている。破片数で三一五点が出土し、すべて一つの埴仏型からの製品とされる。壁に固定するための釘穴をもつものも多い。四尊連坐埴仏は如来形が縦二段、横二列に並ぶ。大きさに微妙な差があるものの構図は十二尊連坐埴仏と同様である。埴仏型の違いによってA・D種に細分される。A・B・Dについては明言できないが、少なくともCについては十二尊連坐埴仏の釘穴まで転写されていることから、四尊分を踏み返して埴仏型が作られている（上原二〇〇二）。通常では陽刻原型から埴仏型を起こすはずが、既存の製品を原型に代用しているのである。廣岡孝信氏は、蘇我氏同族・傘下の氏



第10図 瓦塔仏像部分

1：正法寺山遺跡、2：石名田木舟遺跡

寺にも埴仏が採用されていないことにふれ、「山田寺の埴仏製作体制内に」「陽刻原型が保有されていなかった可能性が高い」と指摘している(廣岡二〇一五)。この場合、寺で所有・管理されたものではないということがいえるだろう。

第二に、瓦塔内陣の壁面に表現された仏像である。埴仏とは用途が異なるものの製作技法は同じで、陰刻の型を用いて仏像を表出している。その大きさを踏まえても埴仏の製作と同様のあり方が想定できるためここでは便宜上埴仏に含めることとする。こうした例は数例しか確認されていない貴重なものである。ここでふれておきたいのが、富山県石名田木舟遺跡と兵庫県正法寺山遺跡出土例である(第10図)。

石名田木舟遺跡からは高欄や屋蓋部などの瓦塔の部材が複数出土しているほか、畿内から持ち込まれたと思われる奈良三彩火舎や水瓶などの仏具も出土している。寺院としての明確な遺構や瓦の出土は確認されておらず、瓦塔を信仰の対象とした、村落内寺院のような小規模な仏教施設の

存在が想定できる。仏像の表出された資料は、縦十二・六cm、横九・〇cm、厚さは板状部で平均一・三cmの断片に天蓋と三尊像があらわされ、瓦塔初層の内陣にはめ込まれたものとされている。中尊の形式や像の表現から、原型の製作は八世紀にはいるものと思われる。これと原型からおこされ、同様の技法によって製作されたものが正法寺山遺跡で出土している（大脇一九九五）。正法寺山遺跡の性格は不明だが、石名田木舟遺跡と同様に瓦塔に納められたものが三種確認されている。うち一つは、石名田木舟遺跡例と細部の表現にわずかな差異はあるが、型への押し込みや焼き縮みによるもので、同範と考えられる。石名田木舟遺跡と正法寺山遺跡は、直線距離にしておよそ三〇〇kmも離れていることに加え、瓦塔におさめてから運ぶということは困難であり、技法も共通していることから、型を携えた人が移動しそれぞれの遺跡の近辺で製作されたものと推定できる。

石名田木舟遺跡が小規模な仏教施設であること、畿内からもたらされた仏具類、僧侶が埴仏型をもちその行先で製作した道昭・法蓮のような例などを積極的に評価すれば、この瓦塔の場合も、「東大寺諷誦文稿」や「日本靈異記」からうかがえる僧侶の広域活動の結果と捉えることではまいらうか。

以上のように、埴仏の伝播に僧侶が関わったものや埴仏型の管理などについてふれたが、必ずしも寺や造営氏族が埴仏を管理していたとはいえず、その背景は多様なもののように思える。

おわりに

最後に、結城廃寺埴仏に関して述べておきたい。結城廃寺は先に述べたように、多量の埴仏を持つことに加え蓮華文の描かれた舍利孔石蓋、極先瓦などがあり、さらに塔心礎が基壇下にあり古様であることなど、東国のなかで

は特異な様相である。軒瓦は国を超えて下野薬師寺や常陸新治廃寺の影響があるが、畿内の影響は見受けられない。だが、埴仏をみると畿内と関わりのあるものが数点ある。これまで検討したように埴仏は僧侶によってもたらされる例があることをふまえると、結城廃寺の特異な要素は畿内からきた僧侶によるものと考えたい。いくつかの型を用いた埴仏を製作し、ヘラや竹管を使用して整形されている稚拙なもの（第4図37、48）については、清水氏が指摘したように在地の壇乙によって新しく作られたのだろう。なぜ僧侶が結城へ来たのかは検討の余地があるが、『日本霊異記』上巻第十縁では「一の禪師を請ふべし」と命じられた使人が「何れの寺の師をか請へむ」と問い返していることから、特定の寺に定めて僧を呼ぶ場合が一般にあったといえる。こうして呼ばれた僧侶が結城で埴仏の製作などに関与した結果が特異な様相につながっていったのである。

本稿では結城廃寺の埴仏を理解し、研究の対象となることの少ない地方の埴仏を検討することが当初の目的であったが推論に推論を重ねたものとなってしまっている。今後また別の視点からもアプローチしていこうと思う。

註

- (1) 同じ原型から作製されたものを「同原型資料」という。同原型資料は、埴仏と押出仏にまたがるものもあり、密接な関わりがあるが（大脇一九八六）。
- (2) 埴仏の研究史について（米田二〇二三）にまとめられている。
- (3) SK-1からは塑像も十一一点出土しており、右足部の塑像は爪先まで丁寧に表現されたものである。塑像と埴仏が伴出する例については、塑像周辺を装飾するために埴仏が利用されたとする指摘もある（猪熊一九九二）。
- (4) 『日本三大実録』元慶元年十二月条。
- (5) 釉の分析の結果、近畿出土遺物に近いことが判明している（橋本ほか一九九五）。

付記

大学に入学してから須田先生にはお世話になり続け、不勉強な私が、修士三年となると同時に考古学にたずさわる職に就くことができたのも先生の親切なご指導があったからこそだと思います。末筆ながら先生の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。

参考文献

- 浅井和春「型押の仏像―埴と銅板―」『名品でたどる―版と型の日本美術―』町田市立国際版画美術館 一九九七
- 網 伸也「八坂寺の伽藍と埴仏」『技術と交流の考古学』同成社 二〇二二
- 猪熊兼勝「塑像出土の寺院跡について」『塑像出土古代寺院の総合的研究』京都大学文学部考古学研究室 一九九二
- 上原真人「埴仏と泥塔」『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所 二〇〇二
- 大脇 潔「埴仏と押出仏の同原型資料―夏見廃寺の埴仏を中心として―」『MUSEUM』四一八号 一九八六
- 大脇 潔「瓦塔にまつられた仏像」『石名田木舟遺跡発掘調査報告書』福岡町教育委員会 一九九五
- 後藤宗俊「埴仏の来た道―白鳳期仏教受容の様相―」『思文閣出版』二〇〇八
- 米田浩之「埴仏分類に関する一考察―仏教遺物研究の地平を見据えて―」『東アジア瓦研究』第三号 二〇一三
- 齊藤伸明「結城廃寺」『結城市教育委員会』一九九九
- 清水昭博「出土状況からみた埴仏用法の検討」『考古学論攷』第一九冊 一九九五
- 辻 史郎「下総国結城廃寺の伽藍配置と瓦について」『古代』一一〇号 二〇〇一
- 東京国立博物館「法隆寺 献納宝物」『便利堂』一九七五
- 中島 正「史跡高麗寺跡第8次発掘調査概報」『木津川市教育委員会』二〇〇八
- 中東洋行「河内百済寺跡出土埴仏雑考」『特別史跡百済寺跡』枚方市教育委員会 二〇一五
- 奈良国立博物館「押出仏と仏像型」一九八三
- 萩原 哉「玄奘発願「十俱胝像」考―「善業泥」埴仏をめぐる―」『仏教芸術』二六一 二〇〇二

萩原 哉「埴仏」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第二五集 大山崎町教育委員会 二〇〇三
橋本正春ほか『石名田木舟遺跡発掘調査報告書』福岡町教育委員会 一九九五

福岡孝信「飛鳥時代の埴仏製作体制―埴仏の積極的使用と画師・仏師の存在に着目して―」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』真陽社 二〇一五

森本貴文編『日本の埴仏集成』『東アジア瓦研究』第三号 二〇一三

引用図

- 第1図（辻二〇〇二）を改変 第2～4図（斉藤一九九九） 第5・6図（奈良国立博物館一九八三）
第7図（中島二〇〇八） 第8図（東京国立博物館一九七五） 第9図（後藤二〇〇八）
第10図（橋本ほか一九九五）